

# イスタンブールは誰のもの？ —ゲジェエコンドウと都市再開発

村上 薫

一九九〇年代半ばのアンカラ留学時代、よく泊めてもらった友達の家は、バス通りから少しなかに入った斜面の途中にあった。居間と台所、寝室がひとつの狭い平屋で、冬は地面から湿気があがって底冷えがし、夏はたてつけの悪い戸や窓から虫が入ってきた。コンクリートの建物が密集するアンカ

ラでは珍しく、家の周りは土と緑のにおいがした。ぶどうを這わせたバルコニーでお茶を飲み、煙草をふかす。庭先で野菜をつくり、花を育てる。彼女の家はゲジェエコンドウだった。

## ●ゲジェエコンドウ

ゲジェエコンドウとはトルコ語で

「一夜建て」を意味し、農村からの移動者がイスタンブールやアンカラなど大都市の周縁部の公有地などを不法占拠して建てた、建築基準を満たさない低質の住宅を指す。一九五〇年代ごろから、農村から都市へ向かう人口移動が本格化した。だが安価な住宅は数が限られていたから、都市にたどりついた人々は、空き地に小屋を建てて住みついた。政府は、住宅供給政策をとらずに工業化に必要な労働力を手に入れられること、また選挙の票を重視したためにこれを

黙認し、恩赦令を出して居住者の財産権を現状追認的に認めてきた。自治体も票と引き替えに道路・水道・電気などの公共サービスを提供した。その結果、土地と家屋が一体となった不動産としての資産価値が上がり、一九七〇年代頃からは賃貸・売買の対象となって、商業的・投機的な性格を強め、移動者が大家、都市住民が店子という逆転現象も起きるようになった。冒頭で紹介した友人は大学を出て公立病院に技師として勤めていたが、両親が離婚後、母と妹とともに父のアパートを出て、公務員の安月給でも家賃を払えるという理由でゲジェエコンドウに移ったのだった。

現在「ゲジェエコンドウ」は三種類に分けられる。第一に、土地の権利証書はあるが建物が不法建築、第二に、権利証書はないが恩赦令により建物と土地の利用権が与えられている、第三に、そのいづれもない場合である。また外観も当初の一間の平屋から、縦横に建て増した結果、アパートとみまがう建物も登場した。たとえば父親と兄弟が同居して収入をプールし、兄弟一人一人に家が行き渡るまで共同出資で建て増しを続けるといった方法がとられる。こうした建物では、家の戸口は別でも、とりわけ両親が健在なうちは食事を両親宅でとる、あるいは昼間母親と兄弟の妻たちが一緒に過ごすことは珍しくない。(ただし親族が同じ建物に住むパターンは、ミドルクラスが住むアパートでも見られる。)余った家は貸しだせば、家賃収入が得られる。ゲジェエコンドウの正確な数は不明だが、ある調査によれば二〇〇二年にイスタンブールの人口の半数以上がゲジェエコンドウに住むとされる。

## ●都市再開発ブーム

このゲジェエコンドウに今、再開発の波が押し寄せている。

ここ数年、トルコでは脱集権化と規制緩和により、自治体が都市住宅公団や民間企業と組み、大規模な再開発を進めてきた。とりわけ中東の金融センターでありグローバルな資本主義経済の結節点



イスタンブールのゲジェエコンドウ。建設現場で働く人も多く、二階部分を足すくらいは朝飯前。

となったイスタンブルでは、五つ星ホテルや高層オフィスビル、富裕層向けゲイテッド・コミュニティなどが建設されて、華やかで現代的な景観がつくられてきた。

そのために進められたのが、工場の郊外移転とゲジェコンドウの撤去であった。中心部に比較的近いゲジェコンドウ地区は市の再開発計画の対象とされ、住民は立ち退きを要求され、跡地には富裕層向けのアパートが建設された。すでに一九八〇年代には、経済自由化政策により都市の不動産価格が上昇したため、公有地占拠にたいするかつての寛容な措置はとられなくなり、新規のゲジェコンドウ建築が困難になる一方、既存のゲジェコンドウは開発業者の手によってアパートへの建て替えが進んだ。だが、現在の再開発は自治体が音頭をとること、また規模の大きさを特徴としている。

ゲジェコンドウの撤去の理由として持ち出されたのは、ゲジェコンドウ地区はテロ組織が影響力を伸ばしやすいため、犯罪の場所であり、洪水や地震など災害にたいしても脆弱だということだった。ゲジェコンドウを一掃し、整然としたアパート群に建て替えてそこに住まわせることにより、住民を災

害やテロ組織の影響から守り、都市の秩序に包摂することができるとするのが自治体や公団の主張である。

●名目的包摂、実質的排除

だが、現実ほど遠い。再開発の対象となったゲジェコンドウ地域では、土地の権利証書を持つ住民には、公団に土地を売却した金を頭金に、新しく建設される贅沢なアパートか、郊外の公団アパートを分割払いで購入するという選択肢が示される。借家人も希望すれば、郊外の公団アパートに移転することができるとも。だがもともと不安定な雇用につく人や福祉受給者が多い住民にとっては、いずれもハードルが高い。アパート購入に踏み切っても支払いが滞れば家を没収されてしまう。

仮に郊外のアパートに無事に移ることができたとしても、ゲジェコンドウ時代に享受していたさまざまな生存手段を失うことになり、庭がなくなると野菜を栽培できなくなり、チェーンの大型店しかないで顔見知りの商店でのつけ買いができなくなり、中心部から離れることで長時間通勤を強いられ、また交通費節約のためモビリティが低下する。また民間警備

会社などを通じて公共スペースの利用や生活習慣にたいする管理も強められる。たとえばゲジェコンドウでは戸口の前に女性が座り、子供を遊ばせながら編み物や夕食用の野菜の下ごしらえをしながら談笑する風景がよく見られるが、アパートの入り口の前に座ったり集まることは禁じられる。家を訪ねあい井戸端会議をする隣人から離され、家から出なくなり、孤立する高齢者もいる。入り口に「アパートでの生活のしかた」として、バルコニーやトイレの正しい使い方、フスタイルを身につけることを強調されるのは、息苦しく、また屈辱的でもある。都市再開発を進めるにあたっては、ゲジェコンドウ住民の社会的包摂という意義が強調されるが、しかし建前はそうだとすると、生存手段を奪われることによつて彼らは実質的には都市社会から排除されてしまっている。表向きは災害やテロの危険性から住民を保護すると言いつつ、実際は世界都市にふさわしい現代的な都市景観をつくるために邪魔な貧困層を見えないところに追いやってただけだとする論者もいる。

公団の強引なやり方にたいして

は、住民組織を結成し、住宅の撤去を差し止め、プロジェクトの計画と実施への住民参加を求める運動も起きている。だが、政党や左派グループ、職業団体など支援者もいるが、世論は住民に必ずしも同情的ではなく、むしろ権利もないのに利益を得ようとする人々だと見なしている。これには、田舎からやってきた貧しい人々が身を寄せる場所として同情の対象であったゲジェコンドウが、経済自由化の過程で利権の対象となったことが大きいだろう。たしかにかつてゲジェコンドウ住民は、土地の提供と引き替えにアパートの一角を受け取ることができた。しかし今ではアパート価格が上昇してしまい、これは難しくなっている。現在のゲジェコンドウ住人の多くは、先に移動した人々から土地や建物を買ったり借りた人々であるとも言われる。たとえ粗末な家でも住み慣れた環境を手放したくない人々もいる。だが雨露をしのぐ小屋の時代から半世紀あまり、ゲジェコンドウは大きな転換期を迎えている。

(むらかみ かおる／アジア経済研究所 中東研究グループ)